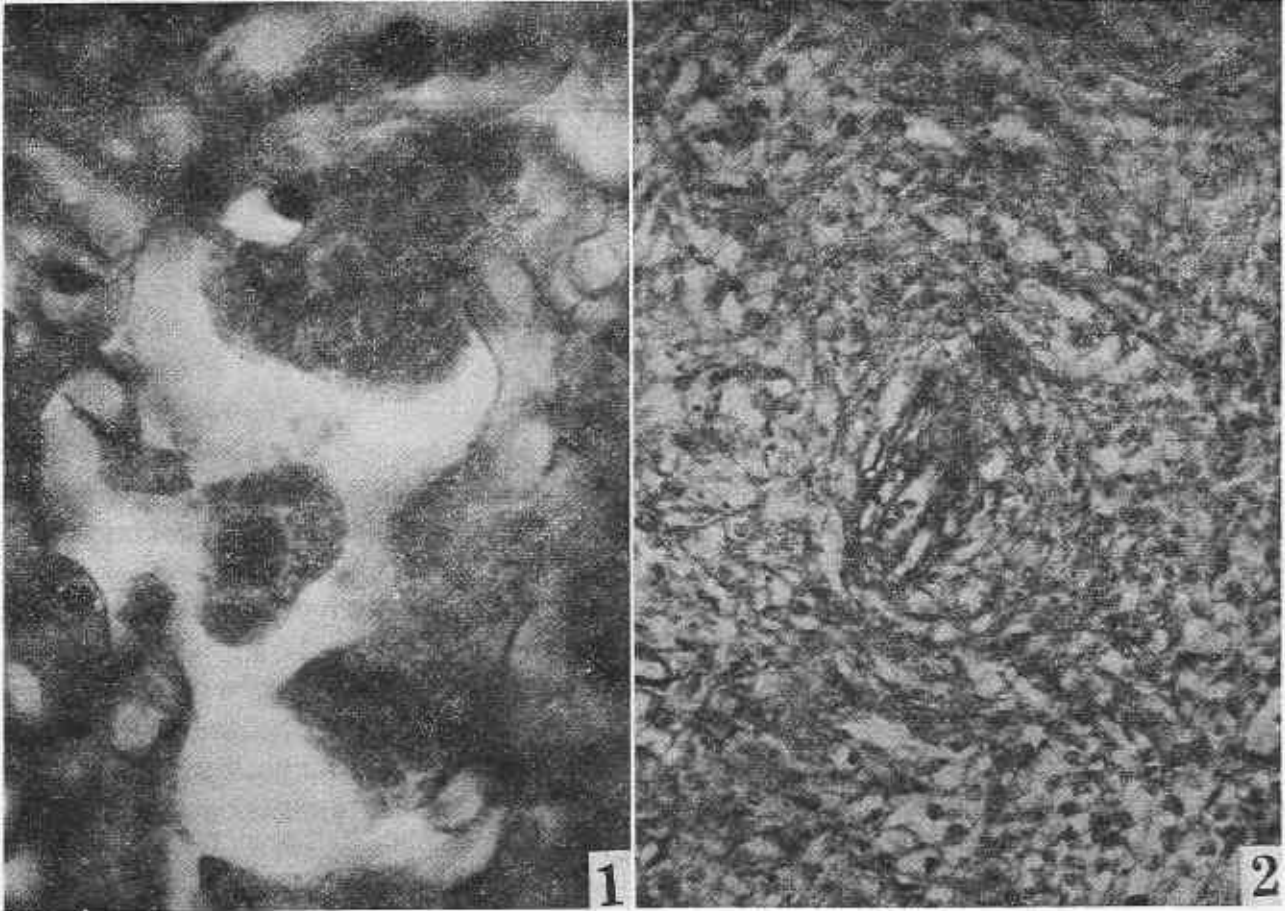


## 山羊における、一側の萎縮と他側の代償性肥大の上にさらに PAS 陽性物質沈着を主徴とする二次変化が加わつた腎病変

東京農工大学農学部家畜病理学教室出題，第7回獣医病理学研修会標本 No. 103



妊娠中に斃死した一山羊の左右腎臓のみが検索された。一応標題のように診断してみたが、その複雑な病変の詳細については獣医畜産新報を参照されたい。多様な病変のうち2つを選び、その写真を提示した。さらに大方の御批判をいただきたい。

写真1 (PAS反応。×200) は肥大した腎臓の、腎小体内にしばしば見られた病変である。強く腫大して剝離しつつある係蹄上皮細胞の原形質内に、大小さまざまな滴状のPAS陽性物質が存在する。この所見から係蹄毛細血管の異常を間接に窺い得る。また尿管上皮細胞内にも同一物質の吸収沈着が著明であり、これらは生前における蛋白尿の存在を示唆するものと考えられる。

写真2 (PAS反応。×200) は、萎縮した腎臓の血管とその周囲にみられた病変を示している。残存する動

脈血管は荒廃して明瞭な輪廓を失い、その周辺には細網組織状を呈した厚い套状の細胞増殖がある。血管から脱出した赤血球は、細網状細胞増殖部の網眼内にはほぼ平等に散在して一見脾臓の赤髄を思わせる。両側腎臓に認められたこの種の血管変化は、先づ輸入細動脈および小葉間動脈の内皮下のPAS陽性物質沈着より始るが、のち次第に外膜細胞の増生をおこしつつこの段階に至るものと考えられた。

私たちは、これらの腎変化をその発生順序からみて、一側の萎縮と他側の代償性肥大からなる1次病変と、血管や腎小体の複雑な2次病変とに分けるのが適切でないか考えた。また原因的には前者では腎盂腎炎の如きものを、後者ではアレルギー性の要因を疑っている。